
とある普通の能力少年。

空丸

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある普通の能力少年。

【Nコード】

N3176BA

【作者名】

空丸

【あらすじ】

【考察】 上条当麻が幻想殺ではなく普通の能力を持っていたら。

インデックスは絶対防御の服を壊されることなく、

御坂美琴の電撃は上条に通じ、

上条さんは無能力者と笑われることもない。

そんな世界（上条さんは若干チート）の物語、ご覧あれ。

前書 前回のおさらインデックス と後書 こたつの上にインデックス が本編より長いと気づきました。本編を読みにくいかもしれません。が許してください。インデックスm)。・。・。(m

プロローグ〜猛暑〜（前書き）

禁書の二次小説です。

以下無理な人は見ないほうがよかれ。

- ・書き殴り無理な方
- ・禁書愛しまくって原作以外は許せん方

以下好きな方は見て。

- ・主人公がチート
- ・神裂さん好き
- ・矛盾あっても面白ければおk

プロローグ〈猛暑〉

とある魔術の禁書目録

x

空丸 妄想

「とある普通の能力少年」

〈LOST THE IMAGINE BREAKER〉

〈プロローグ〉

季節は夏。

能力開発を目的として科学の粋を集めた『学園都市』にも、逃れようのない熱気が訪れていた。

「はぁ……、熱い……」

第七学区の学生寮もちろん例外ではない。安い賃貸マンションであるため、資材に断熱効果を施している可能性は極めて低く、エアコンを使用しない限り部屋は蒸し風呂状態になる。

「……み、水……」

まるでウニみたいな頭髮だな。と、クラスメイトから馬鹿にされるツンツン頭もうなだれ、上条当麻は気だるい表情で冷蔵庫を開けた。

そこには先週買いこんだ食材があるだけで、ドリンクと呼ぶにふさわしい水分は存在しない。

「ふ、不幸だ・・・」

コップを取り出し、水道水を入れるも熱湯が出続けるだけで目的を果たせない。

「くっ、仕方ない。布団でも干してジューズ買いに行くか」

毎日布団を干しなさい。それが、彼の母親の唯一の言いつけであり、彼の守る唯一の決めごとだ。

敷布団とタオルケットを抱えると、右足でガラス戸をあける。少年に防犯の意識はなく、ガラス戸に鍵はかけていない。

「ふーっ、エアコンつけてないと外のほうが涼しいかも・・・な」

ベランダに出ると、そこには白い布がかけてあった。

純白の布は日差しを浴びて輝いており、それが高級な品であると布の知識が皆無である彼でもすぐに理解できた。

「え、えーっと、・・・上の階から落ちてきたの・・・か・・・なっ!?」

拾い上げようと手を伸ばした瞬間、それは生物のようにもぞもぞと動いた。

否、生き物だった。中身の話だが。

その“生き物”の先端が折れ曲がり、エメラルドに光る虚ろな瞳がこちらを曖昧に捉えた。

折れ曲がった反動で銀髪が水のように流れ、ベランダの床まで届く。透き通るような白い肌をしており、それが人間。とても美しい少女だと認識するのに、上条は多くの時間を必要としなかった。

「……あのー、どちら様でしょう?」

日本語は通じるのか、滑り落ちないのか、なぜここにいるのか、さまざまな疑問と質問が生じる中で、上条は日本人として恥じない規範的行動“身分の確認”を試みた。

しかし、少年の思考はあっさりと瓦解する。

「……ご飯を食べさせてくれるとうれしいな」

「日本語で……、しかも話を聞いてくれない」

がっくりとうなだれつつも、上条は少女を抱き上げた。

想いと願いが交差する時、『物語』は始まる。

第一章『歩く協会』

第一章『歩く教会』

「ふもっふもっ」

「……」

「ふもっふもっふもっ」

脱水症状を起こしかけていたことをすっかり忘れ、ウニ頭の少年“上条当麻”は銀髪少女を机越しに見つめていた。

少女はとても幼く見えたが、外人と接することが初めての上条には少女の年齢を推定することができない。自分より年下なのだろうと決めつけ話を切り出す。もちろん初対面の相手には敬語だ。

「……で、あなたは どうしてベランダなんか引つかかっていたのでしょうか？」

「ふもふもふもふもっ」

よほど腹が減っていたのだろう。頬いっぱい野菜炒めを詰め込んだまま少女は何かを喋っている。

「まあ……後でもいいか」

結局、何度もおかわりを催促され、料理を作り足すこと10品目。買いこんでいた一週間分の食料を全て消費した時には、少女は満面の笑みで感謝の言葉を述べた。

「見ず知らずの私なんかのために料理を作ってくれて本当にありがとうなんだよ。この国は他人に冷たいと多くの記録が述べてるけど、そんなことはなかったんだよ」

えへっ。と破壊力抜群な笑顔を見せられ、いや魅せられた上条は再び先ほどの話を切り出す。

「え、えーっと、君が誰なのか、そしてなぜうちのベランダに引っかかっていたのか、できれば馬鹿な上条さんにご教授願いたいんですけど」

少女は表情を曇らせ、そして少し辛そうに答えた。

「それはね、・・・逃げてたんだよ」

逃げていた。とても現実味のない言葉。

「鬼ごっこかなんかしてたのか？」

遊びのイメージから急に年下感が強まり、上条はため口になる。しかし、少女は首を横に振ると、

「ううん、違うんだよ。本当の意味で追われてたんだよ」

本当の意味で。少女は続ける。

「私が何に追われて、何から逃げて来たのか。それは聞かないほうがいいんだよ。それより、ご飯のお礼がしたいんだよ。なんでも言うてほしいかも」

後半のまくし立てるような言葉は、前半の深追いを拒絶していた。上条もそれを理解して、質問を変える。

「あ、ああ、お礼なんて良いんだよ。それより、名前を教えてくださいませんか？」

お安いご用なんだよ。少女に笑顔が戻る。

「私の名前はインデックス。イギリス清教所属のシスターなんだよっ」

上条当麻は後悔した。外国少女の笑顔の素晴らしさを知らなかったことに、日本人に生まれたことに、そして何より先ほど見せた少女の闇を取り除こうともせず諦めたことに。

「インデックス？ って本の目次？」

にわかには信じられない名前だったが、外人の名前の知識などなく、それが冗談なのか本気なのか上条には判断できない。

「禁書目録って言って・・・って、そんなことはどうでも良いよね」
言葉を濁す。上条はもどかしさを押し殺し、違う質問をした。

「インデックスはシスターとはいえ暑くないのか？」

素材は分からないが、手が隠れるほど長い袖に、地面をするほどの長さをもった修道服。見ている側が暑くなるような服装だ。

「ふふーん、これはね“歩く教会”って言って魔術によって結界が施されてるから暑くも寒くもないんだよっ」

胸を張るインデックスに上条は苦笑いで答えた。

「あー、駄目ださういうの。ベランダにいたから尋常な理由じゃないことは分かるけど、魔術とか歩く教会とか、科学の世界で生きてる俺にはとてもついていけません」

両手を挙げ降参のポーズをとる。

「むむむっ、とーまは理解できてない“あるのだからあるのだろう” 科学は信じて、見たことないからって“あるかもしれないある” 魔術は信じないんだねっ」

さりげなく馬鹿にされていることに上条は気付かない。もちろんインデックス本人も自覚していない。

「んー、だって科学の恩恵は受けてるけど、魔術の存在を実際に見たことないし・・・まあ、俺の能力も幻想を現実化するって意味では魔術みただけだな」

「・・・何それ？ 魔術名も儀式もなしにそんなことができるの？」

きょとん、と目を丸くして質問するインデックス。

「ああ、科学の力だからな。脳が演算してるからそれが儀式に近いのかもしいけど」

「へえ、にわかには信じられない話なんだよ」

お互いに相容れない幻想を抱えていることを理解し、幻想自体を共有することはあっさり諦める。

「さて、と。そろそろ行かなきゃ・・・なんだよ」

インデックスは改めてお礼を述べると、そそくさと玄関へ向かう。

「お、おいインデックス。本当に一人で行っちゃうのか？ 追われてるんだろ？・・・何だっ」

上条の言葉を遮り、泣きそうな表情でインデックスは答える。

「とーまは・・・地獄の底まで一緒に飛び込んでくれる・・・かな？」

少女の絶望の端に触れた気がして、少年は歩みを止める。そして、それが答えだとばかりに少女は笑顔で、

「それじゃあ・・・なんだよ」

少女は駆け足で去った。

「・・・なんだよ、それ」

少年には汚れた食器と、少女の甘い香りだけが残った。

第一章『歩く協会』（後書き）

こたつの上にインデックス

禁「とーまとーま、ねえとーま？」

上「ん？ なんだインデペンデックスデイ」

禁「ムッ、とうまもこの世から独立させてほしいのかな？」

上「い、いえいえ、それでなんでしょう？」

禁「とうまつて原作じゃ幻想殺しって能力もってるんだよね？」

上「ああ、そうだぞ。どんな異能の力でもぶち殺す優れ物だっ」

禁「その能力で私の服をひんむくんだよね？」

上「・・・・・・・・」

禁「その上でまだ幼くて可愛い私の裸体を鑑賞して興奮するんだよね？」

上「・・・・・・・・」

禁「とうまは本当は知ってて私の服を破いて襲いかかるうとしてたんだよね？」

上「幻想体現！ インデックスの記憶を消去！！」

禁「……………えっと何の話だっけ？」

上（…………ふう、歩く協会越しても効いて良かった）

禁「思いだしたんだよ！ とつまが原作で短髪とデートしてた話なんだよ！！！！」

上「ふ、不幸だああああ！！！！」

あとがき、完？

空丸「……………あとがきでもなんでもなくね？」

空蝉「そうですね。でも、これからもやってくんですよね？」

空丸「ああうん。こんな湧いて出たような小説を見てくれる人もいたしな」

空蝉「三人だけですけどね」

空丸「十分ですm)。……………m」

これからもよろしく願います

第二章『電撃×幻想』その1（前書き）

読みやすさ追求のために、章をさらに区切らせていただきます

「ご意見」「感想あればどんどん来てください」、*（

第二章『電撃×幻想』その1

ベランダから始まった異国の少女との交流が記憶に変わる昼過ぎ、ウニ頭の少年は学生服に身を包みとぼとぼと公園を歩いていた。

「・・・はあ、不幸だ」

スマートフォン画面を見ると、そこには担任からのメールが出ている。

『上条ちゃんは馬鹿だから補習です』

「生徒にメールする担任なんてあんたくらいだよ」

それは多くの人間の憧れでもあるのだが、当人が気づくことはない。

しかしながら、本来レベル4である上条当麻が、いくら筆記テストの結果が悪くても補習になることはない。

彼の通う学校にはレベル3以上は数人しかおらず、本来特待生として扱われてもおかしくないのだ。

レベル4【幻想体現】イマジンプレイク

幻想を幻想という枠組みから外し、現実を持ち出す能力。

身体に関わる現象のみに限られるので学園都市に7人しかいないレベル5にはなれていないものの、小萌曰く『上条ちゃんはパーソナルリアリティさえしっかり持てば、どのレベル5よりも強くなれるですよー』

「上条さんは別にレベル5なんかには興味ありませんよーっと」

能力開発のために存在する学園都市において、能力の優劣は必然。その中で一番強く、便利で、貴重な能力者になりたいと願うのはごく当たり前のことだ。

しかし、上条にはいくばくの興味もない。

そのせいで今学期の能力テストは特に成長が見られなかった。そして結果を見た担任が成績の低い特別補習に上条も組み込んだのだ。

「……………ん？」

第七学区の公園は無駄に広い。

多くの生徒が利用しているのだが、上条の視界におおよそ公園でやることではない光景が飛び込んできた。

「なあ姉ちゃん。ちょっと面かせよ」

少女一人、男数名。

「・・・嫌よ」

少女を囲む男たちは大学生くらいで、その風貌からおそらくスキルアウト（無能力者）か能力を持った不良だと上条は判断した。

「常盤台のお嬢様がこんな所に一人でいるなんて、よっぽど暇なんだろ？」

下心なのかカツアゲ目的なのか分からないが、少女が絡まれているという状況だけは上条にも理解できた。

その時には一歩、踏み出していた。

「なあ、もし来てく」「いやあ、ちよつとごめんなさいね」

男たちの会話を遮り、少年は少女の前に立つ。

「なんだてめえ!？」

男の一人が睨めつける。

「いやあ、こいつの連れなんですよ。さっ、行こうぜ」

上条は少女の腕を掴み、この場から離れようとする。

「何すんのよ」

少女は勇ましくも上条の腕を振り払い見事な仁王立ちを見せた。

その時、いたずらな風が公園を吹き抜ける。

少女のスカートの中はベージュの短パンだった。

第二章『電撃×幻想』その1(後書き)

こたつの上にインデックス 【その2】

禁「とうまとつま 二回目なんだよ」

上「ああ、こんな嬉しいことはないな」

禁「・・・それは短髪のパンツを見たことかな？」ギロリ

上「パンツなんか見てねー！！ 短パンだ短パン！ ベージュの短パン！」

禁「・・・やっぱり見たんだね。スカートの中」

上「・・・見ました」シュン

禁「本当は縞パンが良かったか思ってる？」

上「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

禁「・・・があー！！」ガブリ

上「だあ！ 不幸だあああああああ！」

完？

ミサカ「・・・縞パンなら私達がいくらでも見せ付けてあげるのに、なんならはきたてほかほかをプレゼントするのに、とミサカはストーカーのようにベランダから二人を覗いています」

空丸「だあ！ きみはまだ出てないから！」

ミサカ「・・・それは献体番号何番のミサカのことを指しているのでしょうか、とミサカは自己アイデンティティを主張します」

空丸「・・・俺の前にはお前しか映ってないよ」キラリン

ミサカ「・・・へっ、とミサカは既婚者に対して軽蔑の視線をぶつけます」

空丸「・・・ふ、不幸だあ」

第二章『電撃×幻想』その2（前書き）

前回のおさらインデックス

上「とてつもなく不幸だけど、前向きに生きている健気な高校生上条当麻は、教師からの不条理な圧力に負けて、補習の参加を余儀なくされる。登校の途中、公園で少女が一人不良に絡まれていた！！トラブルごとを黙って見過ごせない人情厚い上条さんが一歩踏み出す！！少女は無事なのか！？上条当麻の安否は！？とある魔術の禁書目録異聞録』とある普通の能力少年』 お前らの幻想をぶっ殺す！！」

禁「とうまが短髪のスカート覗いて（；；、）ハアハアした後のお話なんだよ」プンブン

上「ふ、不幸だああああ！！」

第二章『電撃×幻想』その2

「お、お前なあ！！ 俺の鮮やかで華麗な作戦を不意にする気か！？」

「誰が頼んだっ！！ アンタなんかの世話になんないわよっ！」

「お、おいつ！ 俺らをシカトすんじゃねえよ！！！」

男の一人が上条の肩を掴む。上条はそれを思い切り振り払うと、口を開いた。

「お前らわかってんのか！？ 大勢でこんなガキ相手にして！」

「・・・ガキ？」

「見てみるよっ！ このふてぶてしい顔、態度！ 可愛らしさの欠片もねえじゃねえか！」

「・・・かけらも？」

「俺だったら少なくとも、もつと美人でスタイル良いお姉さんを狙うぞ！ だが、お前らみたいに数に頼った卑怯な真似はしない！ 一対一でせいせいど」

上条は言葉を止めた。感じたことのない殺気がそこにあつたからだ。

「言いたいこと言ってくれるじゃないレベル4上条当麻。私の中の電気があんたを焼き尽くせって溢れだしてきたわ」

そう、上条当麻は少女を本心から助けに来た訳ではない。少女を助けるという形が一番誰にも被害を及ぼすことがなかったのだ。

しかし、それはもはや手遅れで、

「往生せえやごらああああああ!!!!!!」

少女　常盤台のEースにしてレベル5、通称【超電磁砲】（レールガン）こと御坂美琴は学園都市きつての電撃使いだ。そして放たれた電撃の総量は人を感電死させるには十分であり、

「ちっ!!!」

少女の近くにいた男たちの身は危険極まりなかった。上条は舌打ちすると、右手の拳を強く握り込んだ。

そして彼は、電撃よりも早く動く自分を“幻想”した。思ったよりそれは簡単で、それを現実を持ち出した時、男たちはすでに御坂美琴の電撃範囲外で茫然と立ち尽くしていた。

「相変わらず無茶苦茶だな。ビリビリ」

上条はウニ頭をかきながら呆れ顔で美琴を見た。

「あんま無茶してやんなよ。こいつらもお前がレベル5だなんて知ってたら絡もつなんて思わなかっただろっし」

それにお前も可愛い女の子なんだから。上条は心の中で述べる。

それを言わなければただの説教だとも分からずに。

「・・・相変わらず強者のセリフよね」

少女の肩に届くかどうかのショートヘアが電気で逆立つ。

「お、おいっ、俺はお前に絡む気なんてないぞっ！　ビリビリ!!」

少女はふふふっ、と笑うと、全身に力を込めて全力で電撃を放った。

「ビリビリ言うなーーーーー!!!!」

無作為に放たれたように見えた電撃は一つの塊となって上条に向かった。

(くっ、電撃を受け止める自分を想像しろっ！)

上条の能力では物質を変化させることはできない。電気の流れを変えることも、避雷針を立てることもできない。あくまで“電撃に耐えることができる自分”を幻想し、それを現実を持ち出すのだ。

落雷したような大きな音が公園に響いた。

「つつっ、本気で撃つなよ、ビリビリ。誰かに当たったらどうするんだ？」

まるで自分は当たっても大丈夫かのような言い草に美琴は苛立ちをつのらせる。

「ほんとあんなたってむかつくわっ!!」

連続で電撃を放つ美琴。三つの閃光は的確に上条を捉えている。

が、それが実際に上条に当たることはない。“雷より素早く動ける自分”を現実に持ち出した時、彼はすでに公園から立ち去っていたのだから。

「・・・何よそれ・・・何よそれ!!!」

美琴の叫びも想いもまた、彼には届かない。

第二章『電撃×幻想』その2（後書き）

こたつの上にインデックス 【その3】

上「こんなぼんぼん更新して作者は大丈夫か？」

禁「大丈夫なんだよ！ 作者は執筆スピード“だけ”が得意なんだよ！」

上「・・・おそらく泣いてるだろうな」

禁「ところで、今回の話ってアニメの展開に似てるよね？ とうまが短髪の雷打ち消すところとか」

上「あー、原作では打ち消してるけど、この上条さんはただ我慢してるだけで、電撃もろに食らってるぞ」

禁「ええ！？ だ、大丈夫なのとうま！？」ナデナデ

上「あ、ああ、ご都合主義の作者だから大丈夫なんじゃね？ 物理的にいっいたら死んでるよ確実に」

禁「いや、でもそうとは言い切れないんだよ。落雷を浴びて死ななかつた人ってけっこういるんだよ」

上「え？ そうなのか？」

禁「それでも、あんなすぐに動けるなんて不可能だろうから、やっぱり作者って“アホ”なんだね」ニコニコ

上「……………ドンマイ」

完？

とある屋台の愚痴空間

空丸「……………グスン」

姫神「おー、よしよし、バカなりに面白い展開考えたんだよね」
「ナ
デナデ

空丸「だって、異能力とはいえ、能力者の手から離れたらそれはただの現象だろ？それを打ち消せるなら幻想体現で耐えるくらいできてもいいじゃないか」
「ビエエエン

姫神「まあ、私が出ていない限り、どうでもいいんだけどね」
「ニコリ

空丸「……………じ、実は」

姫神「……………何かな？ マジカルステッキの出番かな？」
「チャキ

空丸「つて、それスタンガンだから！！ 怖いから！」
「ビクビク

姫神「早く言わないとマジカルステッキが誤作動しちゃうかも」
「ブ
ーン

空丸「なんかバ ブみたいなきりしてゐるから!! . . . 実は、このインデックス編が終わつたら . . . 」

姫神「私がヒロインの話が始まるんだよね? 」

空丸「構想は二種類あつて . . . 」

姫神「ひとつが私を上条当麻が助ける王道ルート。もうひとつが私が当麻を助ける逆ルートだよね? . . . きゃ、当麻って言つちやつた」テレテレ

空丸「ひとつが一方通行とガチバトル編で、もうひとつが上条当麻がジャツジメントをしていた過去の話（オリジナル展開）なんだけど . . . きゃあああああ!! 」

姫神「あ、ステッキが勝手に . . . ま、いつか」スタスタスタ

空丸「ふ、不幸だあ ガク」

第三章『特別補習(戦闘シミュレーション)』その1(前書き)

前回のおさらインデックス

「ビリビリ」「ビリビリっばりっびりりっびりりっびりりっピッピカ」

美琴「だあああ!! なんなのよ! この摩訶不思議な生き物は!」?

上条「・・・よく分らんがこのポ モンの代表的生物みたいなのは俺の幻想が生み出した御坂美琴のイメージらしい」

美琴「・・・あなたのあたしに対する気持ちがよく分かったわ」
「ビリビリ」

上条「ほ、ほらっ! またビリビリしてる!」

「ビリビリ」「ピッピガチュウ?」

美琴「二匹まとめてぶっとびなさい!!」 「ドガーン」

上条「だあああ!! 不幸だあああ!!」

禁書「みたいな展開だったんだよ」

第三章『特別補習（戦闘シミュレーション）』その1

「……………あえ？」

……気付くべきだったんだ。

上条当麻は後悔する。補習の指定場所が体育館だったことに。

上条当麻は嘲笑する。体操着を律儀に用意してたくせに普通の補習を想像していた自分に。

上条当麻は　　茫然と立ち尽くす。

目の前で殺気をまき散らせる体操着姿の男達を見て。

「上条ちゃん、今日は特別補習の戦闘シミュレーションです」

同じく体操着姿の小萌先生の姿がそこにあつた。小学生と言っても100人が100人とも信じるであろう容姿に男達の中の数人はそちらに熱意を向けている。

「上条ちゃんVSモテナイ男軍団です　　いえーいどんどんぱっぱぶ」

うおおおおお！ と、悲しみの雄叫びをあげる男達。ステージ上には女子生徒が男達を見て呆れている。

「上条ちゃんはそのヘタレ根性と向上心のなさを加味しても、うちの学校のエースであることは間違いありません。だからこうして無理やり能力の向上を図りますです」

「そんなことありませんので今すぐ帰らせてくだ「無理です」

小萌先生が自分を特に気にかけていてくれていて、それがレベル4だからという理由でなく、“上条当麻”という人間を心配してくれていることは彼自身すごく感謝している。

しかし、こと自分のために戦うことが苦手な上条にとって、この状況はすごく燃費の悪い展開だった。

「どうせ上条ちゃんのことですから、『はあ、めんどくさい。帰ってエロ本でも読みたい。委員長ちゃんのおっぱい想像しながらハアハアしたい・・・』とか思っているのでしょうか？ そうは問屋がおりしません」

「いや、吹寄制理の胸は確かに超絶魅力的な豊満おっぱいだ、あいにく上条さんはクラスメイトを想像しながらハアハアする趣味はございませんことよ」

「・・・上条当麻。貴様というやつは」

ステージ上から強い殺気が上条を突き刺す。

「……………は、ははっ、委員長様おられたのですか？」

吹寄は無表情のまま上条を見下していた。それはクラスメイト（自分も含む）にとってご褒美であり、至極恐悦だった。

「吹寄ちゃんを含む、ここの女子生徒たちは上条ちゃんファンクラブなのですよ〜」

「……………え？」「は？」

上条と吹寄の声がかぶる。

「冗談です　でも、多くの生徒は上条ちゃん能力を見たくて集まってくれたのですよ」

学園都市では珍しくないレベル4も、この学校に限定してしまえば、上条ただ一人しかない。興味レベルから真剣に勉強したくて集まった生徒達なのだろう。上条はため息交じりに口を開いた。

「……………たくっ、分かりましたよ。この上条さん、悩める未来の希望達のために一肌脱ぎましょう」

腰を落とし、軽く屈伸運動をする。上条の能力は状況によっては身体に負荷をかける場合がある（ほぼその場合なのだ）。だから、準備運動は念入りにおこなう。

「あ、上条ちゃん、言い忘れてましたけど、上条ちゃんが負けるとステージ上のか弱い女の子達はその荒れ狂う男達の毒牙にかかってしまいますからそこそこ頭に叩き込んでおいてくださいね」

禁「とうまはいつかウニに圧迫されて死ぬと良いんだよ」「ニコリ

上「……………不幸だぁ」

完？

空丸「おれがおっぱい好きなんて失敬な」

空蝉（久しぶりの出番……）「おっぱい嫌いなのですか？」

空丸「いやっ！ おっぱいを愛してるんだ！ おっぱいのために死ぬる……！」

空蝉「いますぐ死んでください」ドゲザ

空丸「懇願！？ 悲願！？ 哀願！？」

空蝉「冗談です。私は一応ナイスバディクール忍者設定なので主人であるあなたになにされるか不安になったのです」どきどきー

空丸「カツコ外の感情が棒読みだよ！？ しかもその設定何！？ 中2なの！？」

空蝉「いえ、25歳です」キリリ

空丸「……………；……………ウツ」

空蝉「ところでマスター。この話はオリジナル展開ですよね？」

空丸「ああ、バトル好き（主人公チート並みの強さ好き）の俺としては是非とも入れたかった話なんだ」

空蝉「つまり、この話が面白いかどうか、マスターのオリジナル小説（今後執筆予定）の面白さを決めるといふ訳なんですな」

空丸「どうか本当に心の底から面白くなくても面白いと褒めてください」

空蝉「次回もザンザツザンザツウ」

空丸「惨殺しねーよ！？ 全年齢対象だよー！？」

完

第三章『特別補習(戦闘シミュレーション)』その2(前書き)

前回のおさらインデックス

禁「吹寄のおっぱいに興奮」

上「ちよちよ、インデックスさん」アセアセ

禁「吹寄の巨乳にハアハア」ズズイ

上「ま、まずい、このままじゃ俺のイメージが……」

禁「吹寄の淫乱な胸にもっ」ドガッ

吹「……」スタスタ

上「……鬼がいた」

第三章『特別補習（戦闘シミュレーション）』その2

「……………は「それではスタートです」

開始の合図と同時に、四人の男が前に飛び出した。

おそらく筋力操作系の能力だろう。

上条の能力に近いものがあるが、自分だけの現実が能力を左右する限り、筋力を強めるのにも限界がある。

（真正面からぶつかる自分を創りだせ！！）

上条の幻想は筋力を強化する訳ではない。あくまでそのままの自分が、“幻想”通りの動きを見せる。

四人の内、二人と正面からぶつかり、体育館に衝突音が響く。

「……………よお、上条当麻。今日こそお前に勝つ」

「えーっと、何度か俺に挑んで返り討ちにあっちゃった先輩……でしたっけ？」

「うるせえ！！！！ お前がいなければこの学園のエースだった男だあ！！！！」

二人の男は左右に跳ぶ　それを割って入るように別の男が炎を

纏って飛び込んできた。

「うわぁぁぁぁぁ！」

炎を纏う・・・いや、火だるま状態の男は泣き叫びながら上条の横をすり抜けた。

「くっ、暴走かつ!？」

上条は迷わずその男の腕を掴んだ。

炎が上条に燃え移り、ステージ上では悲鳴が上がる。吹寄の目にも不安が見てとれた。

(炎は酸素を餌に燃えている。酸素を・・・いや、そうしたらこいつは窒息する。それならって、なっ!?)

「うぉぉぉぉお!!！」

火だるま人間の影から木刀を持った男が跳びかかる。

空中を歩いているところから、足場を創る能力を持っていると上条は判断した。

「火だるま君、すまん！」

上条は火だるまの男を壁に投げ飛ばした。

火の能力者ならなんとかできるだろう。

・・・できなければ後で助けてやるからな。上条は心の中でつぶやく。

その一方、左手で振り下ろされた木刀を掴む。

“正確に威力を殺して掴みとる自分”を幻想したのだ。

普段から弱そうなレベル4として喧嘩を売られる上条にとって素人に毛の生えたような攻撃を受け止めるなどとても容易いことだ。

「隙あり!!」

後ろから声がした。

能力を判断することはできないが、決定打を繰り出していることは確かだ。

「食らうかよっ!!」

上条は能力を使うことなく、宙に浮いている木刀の男の下へ潜り、そのまま上空めがけて蹴りを加えた。

「かはっ」

木刀の男の叫びとともに、『ガッン!』と床を叩く音が響く。

先ほどの声の主は重さを変える能力を持っているのだろう、新聞紙を丸めただけの棒が驚くほど重たい音を発生していた。

蹴りあげた木刀の男を新聞紙の見えた方向へ吹き飛ばす。『ぐえ』

と二重の叫び声が聞こえた。

そうしているうちに最初の四人が再び視界へ現れる。

一人は蹴りを、一人は拳を、一人は跳びかかり、一人はスライディングタックルを繰り返している。

「どいつも、こいつもありきたりな攻撃ばかりしやがって・・・」

上条はうんざりしていた。

男達から本気で勝ちたいという意味が感じられなかったからだ。

「この上条当麻を怒らせるなよっ！！！！」

四人より早く動ける自分を幻想し、体現する。

スライディングタックルの男を踏みつけ、

蹴りの男の顔面に拳をぶつけ、

跳びかかってきた男を頭突きし、

四人目の男の拳を手で受け止める。

「ひ、ひいっ！」

男は床で失神している仲間たちを見て、悲鳴を上げた。

そうじゃない、逆だろ。

「なあアンタ。男だったらさ、仲間がやられて悲鳴をあげるんじゃない、その仲間のために拳を繰り出すだろ。じゃないと、誰がやられた仲間を助けるんだよ。お前が自分を守ってくれる仲間がいないと動けないっていうんなら、誰かの後でしか行動できないっていうんなら、まずは

その幻想をぶち殺す!!!」

そして、上条当麻はただ一人、

体育館の上で立っていた。

「勝負あり！ 勝者上条当麻!!!!」

小萌先生の高らかな勝利宣言とともにステージから黄色い歓声があがる。

「ふん、レベル4なんだから勝って当然だ。・・・だが、よく頑張ったな」

吹寄は満足そうに体育館を後にする。ここで上条を褒める自分など想像したくもなかったからだ。

その理由は彼のためであり、自分の気持ちは押し殺しているのだが、本人すらそれに気付かない。

「おめでとうなのですよ、上条ちゃん」

小萌先生の極上の笑顔に祝福され、上条はまんざらでもなかった。

例えその後何が続いていようとも。

「それでは、これから補習なのですよ」

曰く、これは“特別補習”であり、補習の際に議題とする『パソナルリアリティ』の実践演習だという。

上条当麻は天を仰ぐ。そして、

「不幸だああああああ！！！！」

第三章 『特別補習(戦闘シミュレーション)』その2(後書き)

こたつの上にインデックス

上「あー疲れたー」

禁「お疲れ様なんだよとうま」ナデナデ

上「オリジナルの展開って割にあつというまに終わっちゃったな」

禁「まあ、禁書編は駆け足で終わらす気であるからね作者は」ブン
ブン

上「そういえばこのまえ届いた台本は『ビリビリ編』と『ジャッジ
メント編』って書いてたけどどっちをやるんだろっな?」

禁「そんなの『禁書編その2』に決まってるんだよ」エヘン

上「……………全部アドリブか?」

禁「勢いでどうにかなるんだよ」エヘン

上「……………不幸だあ」

完?

とある作者の未来予測

空丸「まあ、作者的にはジャッジメント編 一通編のほうが盛り上がると思ってます」

空蝉「ほう、それはなぜですか、マスター」

空丸「ジャッジメント編はなんと上条当麻がジャッジメントのエースとして活躍する話なのです！」

空蝉「ほう！ それはビアンカもマホカクタだね」

空丸「海外のテレビショッピング風に言いたかったんだろうけど、それただのドラクエだから！」

空蝉「それでそれで、ジャッジメント編ってことは、白井や初春との濃厚かつ大胆な描写がバンバン飛び交うというのですね！？／／／／」

空丸「空蝉は俺の煩惱の塊だもんな。でも、中学時代だぞ？ 中学男子なんて、妄想しかできないヘタレの集団だぞ？」

空蝉「お前それヘタレ集団に囲まれても言えんのかよ？」

空丸「……助けてージャッジメントさーん！」

空蝉「……それでは次回もザンサツザンサツウ」

空丸「それ流行らないからね！？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3176ba/>

とある普通の能力少年。

2012年1月9日04時55分発行